

著者 木村

序・花岡事件



東京堂出版

序・花岡事件

上田 満男

昭和四十八年四月、札幌をはじめ北海道各地で日朝合同の調査団による朝鮮人強制連行、強制労働、虐殺の真相調査が行われた。北海道支社報道部デスクをしていた私は、夕刊勤務を終える
と札幌・石狩会館での聞き取り調査の取材に出かけた。

「この傷跡を見せてください。」そういって下着をまくった崔千守(チェ・チョンスウ)さんの背中には、真ん中から腰にかけてひきつったように傷跡が焼きついていた。「真っ赤に焼けたデレッキ(石炭ストーブの火かき棒)でたたかれたんです。」

また、金達善(キム・タルソン)さんは、昭和十四年八月、十七歳の時、夜道を一人で歩いていると、いきなり後ろからつけてきたトラックに詰め込まれ、そのまま他の三百人とともに汽車、ついで貨物船の船底に押し込められた。着いたのは函館。さらに長万部町の静狩金山へ連行されタコ部屋に入れられた。

あまりのひどい仕打ちに四カ月後、ストライキというより暴動が起きた。監督たちだけが食べている白米を奪うためだった。たちまち警官三百人が出動、六人の仲間とともにつかまった。「三

年たったら帰す」という約束は、死ぬか、でなければ片輪にならない限り、この地獄から出られなかった。その後、虻田のタコ部屋で働かされた時、棒頭が「穴を掘れ」というので、いわれた通りにすると、病気で働けなくなった仲間を、その穴に放り投げ、上から土をかけて埋めてしまったという。

三日間のこの聞き取り調査に、三十数人の被害者が当時の虐待の事実をある人は淡々と、またある人は声をふりしぼるように語った。

この取材で昭和十八、九年、当時の日鉄室蘭製鉄所に連日、勤労奉仕に狩り出された暗い思い出が、ふっとよみ返った。貨車からの鉱石おろしや、焼結工場でのレンガ運びをさせられたが、いつも一緒にアメリカ人の捕虜、それに中国人、朝鮮人労働者が多数働いていた。なぜか中国人だけは、ひと目でそれとわかるように上下とも白い服を着せられ、鎖でつながれていた。現場監督のような男が、ひっきりなしに一人ひとり後ろから細長い竹を振りおろしていた。白い服のやせた若者たちが「ヒーヒー」と悲しげな声をあげていた。われわれはそれを当り前のことのように横目で見ていたものだ。

われわれは昼になると、製鉄所内の下請け飯場で弁当を開いた。その時、いつも横で食事をとっていたのが朝鮮人労働者だった。級友の一人が「われわれは国家のため、戦争に勝つために勉強を捨てての奉仕は当然と考えているが、あなた方もそういう意識で、わざわざ遠くから来たのか」とたずねた。労働者たちは一瞬、話をやめると、その中の一人が朝鮮語でどなり出した。「強

制連行」をまったく知らないわれわれは、労働者たちの突然の怒りにぼう然とするばかりだった。昭和四十九年八月、秋田支局に赴任して、支局の清水弟記者から「花岡事件」を聞き、似たような事件の多いのに驚かされた。そして野添憲治さんが一人、聞き取り調査に取り組んでいると知って、これは大変だなと思った。花岡と北海道では金属と石炭の違いはあっても坑内労働に変わらない。終戦前、道内の炭鉱で坑内労働させられていた強制連行の朝鮮人は三万人を超え、中国人も二千六百人にのぼっていた。そして過酷な労働、虐待ぶりはたくさんの日本人が体験し、目撃していたはずである。が、なかなか当時のことを話してくれる人は少ない。

道内の真相調査でも日本人の証言は、極めてまれであった。その中で札幌市に住むタクシー運転手から、昭和十八年九月、三菱美唄鉱（現在廃坑）での事件について証言があった。

それによると、石狩地方の集中豪雨で美唄川がはんらん、上流谷合いにあった朝鮮人労働者のタコ部屋が危険になった。ところが部屋の監督たちは、百人近い労働者の「助けて」の叫びを背に、旋錠したまま逃げ、間もなく部屋もろとも濁流にのまれた。運転手の父親が同鉱の測量士で、ともに目撃した、という。こんな悲惨な話はおそらく氷山の一角であろう。その後、真相調査団の現地踏査に記者を同行させ、現地での生々しい傷跡を報道した。が、これに対し、「なにをいままさら、こんなことを取り上げるのか」という抗議の電話が二、三、報道部デスクにかかってきた。私には大きな衝撃だった。清水記者から「戦後三十年、埋もれたままの花岡事件を書きたい」といわれた時、なんのためらいもなく賛成したのも「いまさら……」などは、三十年後だろう

と五十年後だろうと、あり得ないと考えていたからである。事実の探究の中で真の友好とは、そしていろいろな意味で、弱者にムチを打つ人間とはなにかを考えてみたかったからである。

朝日新聞編集委員(前秋田支局長)

目次

序・花岡事件 上田満男 三

I 花岡事件・30年の壁 三

四百十八人 一四

全員赤痢 一五

補導員 一七

強制連行 一九

改修工事 二〇

木箱 二三

診断書 二四

同国人 二六

蜂起計画 二六

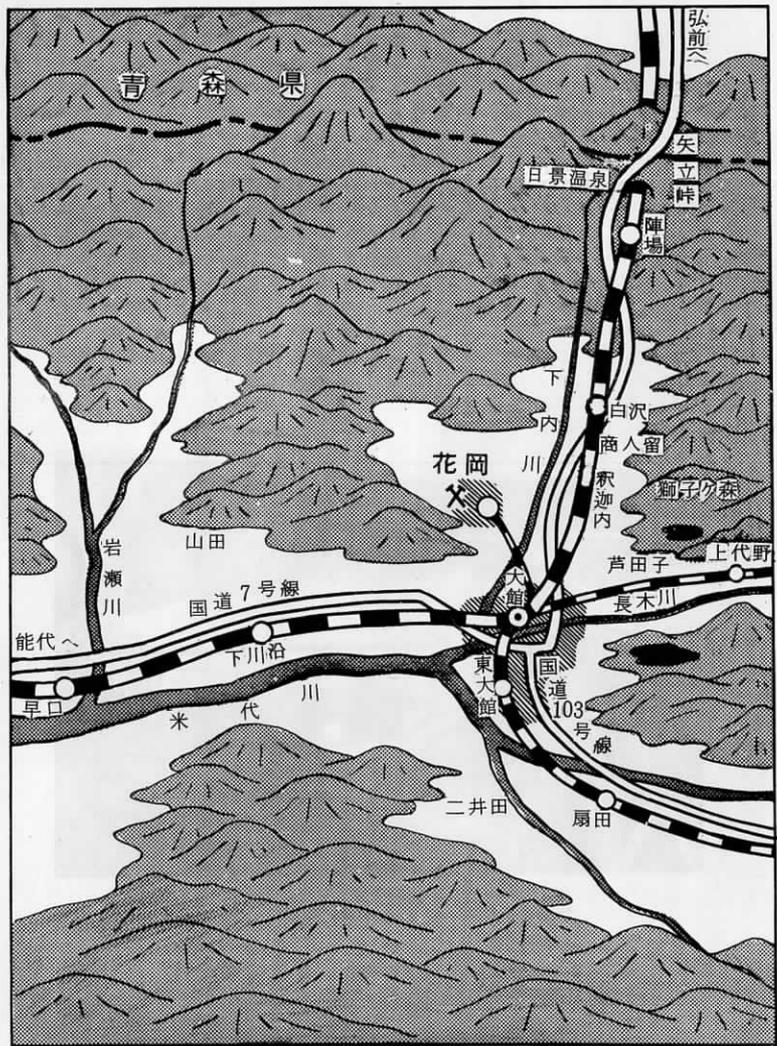
暗い夜 三〇

白い道 三三

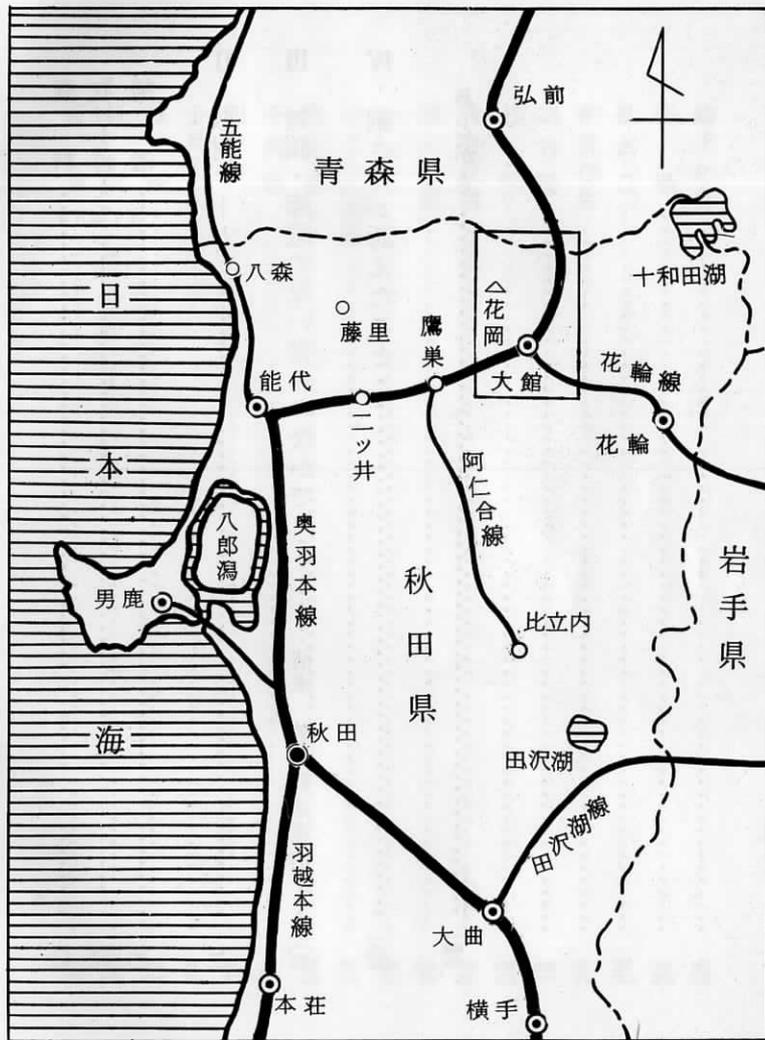
目次

獅子ヶ森	三
広 場	三
日本刀	三
非常召集	三
地方民	三
どんぶり	三
横浜裁判	三
華人特配	三
キセル	三
ひとくわ運動	三
作文集	三
不再戦	三
四分の一	三
小兵大人	三
戦 後	三
証 言 (上)	三
証 言 (下)	三

資 料	七
取材を終えて	七
補 遺	七
II 取材ノート	三
III 対談・際限のない営みのなかで	三
清水 弟 vs 野添憲治	三
IV 劉さんが訴えたこと	三
あとがき	三



花岡事件ノート参考図B



花岡事件ノート参考図A